

図書館と学生時代

太田瑞希子 専任講師

主担当科目：EU 経済論

学生時代、図書館で勉強ができなかった。勉強しようと勇んで図書館にこもっても、すぐに書棚と書棚の間を往復して背表紙を眺め手に取り読み始めてしまう。終わると別の階や地下書庫に行ってまた気になる本を手に取り、そしてすぐに帰宅時間になる。母校の図書館にはオープンなものから穴蔵のような隠された空間まで多様な勉強スペースが設けられ、どこかには誰かしら友人がいたので誘い合って休憩スペースでコーヒーを片手に雑談するのも日課だった。図書館で勉強できない自分を「意志が弱い」とも思ったが、図書館で知を得るという行為こそ本来のあり方であると途中から開き直った。

そう決めてから全体を探索すると、新聞だけ毎日読みに来る人、資格の勉強に専念する人、人の来ない死角にこもる人、見る度に違うジャンルの本を読んでいる人などそれぞれの図書館との付き合い方が見えてきた。毎日それぞれのパターンが繰り返されるゆったりした時間が図書館にはあった。

もう一つ忘れられない図書館がある。英国留学時代に通った大学図書館で「Old Library」と呼ばれたその建物は、中心を大きなホールが貫きその両側に天井まである書架が並び、間には4~5人程度が同時に勉強できる大きな机が設置されたヨーロッパの伝統的図書館スタイルだった。二階には回廊が張り巡らされ、やはり天井までの書架が並んでいた。回廊から一階を見下ろせば何かこの大学の学術の歴史に飲み込まれるような荘厳な空気さえ感じた。授業で指定された参考文献リストを片手に地下書庫に降りていくと廊下の両側に小部屋の分厚いドアが並び、そのいくつかの奥にはまた薄暗い廊下が続く迷路のような地下書庫では我々学生は「Murder in the Library」という言葉しか思いつかない」と言いながらいかに早く資料を見つけて抜け出すかを競い、終わると一目散に地上に戻って「We survived.」と笑いあった。

思えば図書館があれだけ生活の一部だった日々は学生時代にしか存在しない。今では図書館で全く関係ないジャンルに手を伸ばす時間と精神的余裕はほとんど無くなったが、いずれ余裕ができれば日本大学経済学部の書架を制覇したいと目論んでいる。

私のおすすめ本

1. 『経済学大図鑑』 ナイアル・キシテイニーほか著、三省堂、2014年

経済学の歴史や理論の変遷を豊富な図説とわかりやすい文章で解説した図鑑スタイルの経済学辞典。貨幣や財産権といった考えの発祥から始まり、産業革命と経済革命の時代、戦争と不況の時代、戦後を経て現代に至るまで、経済学に登場した理論や背景となる世界的事象が網羅されており、自分がいま学んでいるのは経済学の全体図の中でどこに位置するものなのかを把握することができる。履修選択やゼミ選択に迷った際にも参考にして欲しい。

2. 『中流社会を捨てた国 格差先進国イギリスの教訓』 ポリー・トインビー、デイヴィッド・ウォーカー著、東洋経済新報社、2009年

世界各国におけるポピュリズムの高まりの背景には格差社会の拡大があることは広く指摘されてきたが、それが EU からの離脱という歴史的な動きとなって現れたのが Brexit である。この本では、過去数十年に渡る英国内の富裕層と貧困層それぞれの様相を描いている。富裕層にはますます富が集中する一方で貧困層は困窮を極める描写とその背景分析は、近い将来の日本の姿を想起させ危機感を掻き立てる。